日本医史学会平成一九年六月例会
シンポジウム「医史学と文学――吉村昭氏を追悼して」

一、「医学史と文学」論序説
――司会にあたって――

岡田靖雄
精神科医療史研究会

日本医史学会関係の学会で何回かお話しくださり、わたしたち研究者にまさる史実探究への情熱をおしえてくださった作家吉村昭さんは、二〇〇六年七月三一日になくなった。その一年忌をまえに、日本医史学会六月例会（六月二三日）は追悼シンポジウムにあてた。いつもは二〇名前後の参加なのに、当日の会場は九〇名をこす人であふれ、事務局は配布資料の増刷におわれた。

司会にあたり、医学史と文学との関係をざっと整理してみたい。わたしは精神科医なので、あげる作品は精神科にかたよることをおゆるしいただきたい。

一・記録文学（手記をふくむ）の重さ

第一にのべたいのは、医療の記録としての、手記をふくむ記録文学の重さである。わたしは、二〇〇五年三月に作業をおえたハンセン病問題に関する検証会議のしたにおかれた、ハンセン病問題に関する検討会の委員として、調査・執筆にあたってきた。検証会議の最終報告書は約一五〇〇ページで、二・五キログラムとじつにおもい。ノートをとりながら、これをよみとおすのに、一年あまりかかった。ところが、そのあと堀田善衛・永丘智郎編『深き淵から　ハンセン氏病患者生活記録』（新評論社・東京、一九五六年）をよんで、ぐっとうちのめされた。新書版のちいさな本だが、ハンセン病患者のなまの体験がのべられていて、ずっとおもい。ここには、事実をこえた真実があるとつよく感じた。

日記、闘病記、自伝の類いもここにいれてよかろう。

これに関連して、「実録」の問題がある。実事記録から、実録体読みもの、小説（実際の事件の重要人物は実名のままで〔あるいは、それとわかる仮名にして〕、虚構をふくむ読みもの）までと、幅ひろいものをふくむ。その例として、錦織剛清『神も仏もなき闇の世の中』（はじめ忠愛社書店・東京、のち春陽堂・東京、一八九二年）および渡邊網講演『明治奇獄掃魔の曙』（西森敏功・東京、一八九二年）をあげることができる。

相馬事件とは、今日の統合失調症になったとおもわれる旧相馬藩主の監禁・入院をめぐる大騒動で、精神科医療史ではライシャワ大使刺傷事件をうわまわる大事件であった。錦織ら旧家臣の一部はこれを裕福なお家乗っ取りの陰謀だとして、たとえば、美貌の妹を身代わりに見合いさせて先天性鎖膣症（穴なし小町）の姉をとつがせて、主君をくるしめた、などと主張した。講談仕立ての後者（「掃魔」はもちろん「相馬」のもじりである）は、錦織剛清校閲となっていて、筋書きは両者とも同一である。そして前者は、ちくま書房の『明治文学全集』中の『記録文

学集』（一九六七年）に、後者は岩波書店の『新日本古典文学体系明治編』の『明治実録集』（二〇〇七年）におさめられている。錦織のものは一方の当事者の手記ではあるが、かれのあまりに一方的な思い込みと誤りとがおおすぎる。これを「実録」とよぶならよいが、「記録文学」としては首をかしげたくなる（あるいは、記録文学とはいっても虚構性のつよいものもある、ということかもしれない）。

二．作家による、医学史上重要な出来事の記録・描写

ジョナサン・スウィフトの『悪疫流行記』は、一八世紀はじめのロンドンにおけるペスト流行の記録として重要なものであった。石牟礼道子の『苦海浄土』（講談社・東京、一九六五年）は、水俣病への関心を切なくもかきたてた。正岡子規の「墨汁一滴」（一九〇一年）、「仰臥漫録」（一九〇一年）および「病牀六尺」（一九〇二年）は、当時における脊椎カリエス患者の生活・苦しみをえがきだしている。こういった例は、いくらでもあげることができる。

ここでは石上玄一郎の「精神病学教室」をとりあげる（「石上」は、著者みずから「いしがみ」と、また時期により、「いそのかみ」ともよんでいる）。これは一九四二年の『中央公論』一〇月号に発表されたもので、翌年同題の単行本（中央公論社・東京）に収録された。当時はたいへんな話題になった。ここにえがかれているのは、のちに脈なし病としてしられる事例をうけもった医師の苦悩で、教授は病態解明のために脳血管写を命じるが、その危険性からかれはためらっている。患者の命より研究だとする教授にかれは屈して、検査をおこない、脳血管の異常はあきらかになったが、患者はしぬ。じつはこの医師は、東京帝国大学精神病学教室にいた津川武一で、教授は内村祐之である。医師が発狂するという最後をのぞいては、筋はほぼ事実にそっている。

石上は、津川の弘前高校時代の友人であった。石上は当時創元社の記者で、津川が当直のときよくきてとまった。

そして、この事例の診療録をよんだらしい（そう、津川からきいている）。内村は「石上」とは津川のペンネームとおもい、津川にはげしくいかった。津川は弁明したが、その事例をかいた津川の論文は内村ににぎりつぶされた。脈なし病は、はじめ眼科の高安右人が眼底における花冠状動静脈吻合を記載して高安病とよばれていたが、橈骨動脈の脈拍も欠如していることから、佐野圭司らの記載（一九七〇年）による「脈なし病」の呼称が定着したものである。津川の論文が発表されていたら、かれは脈なし病の発見者となっていたろう。ともかくも、「精神病学教室」は、発表されなかった脈なし病例と、研究とヒューマニズムとの葛藤とをえがいた問題作だったのである。

ここで当然うかびあがるのは、吉村昭および司馬遼太郎の二人である。二人はともに医学史に関係する作品がおおい。調べ方もかなり徹底していた。司馬が大作品をかくときはトラック何台分かの資料をあつめると、また吉村は現地に何回も足をはこんで、当日の天気がどうだったかまでしらべつくしたと、きいている。わたしははじめ司馬の医学史に関する小説を、自分の専門でない分野の知識をおぎなうために、よもうとしていた。しかし、司馬は大事なところをはぶいたり、ゆがめたりしているときいて、司馬の作品をよむことをやめた。このあたりは、シンポジストの酒井シヅによりのべられるだろう。

歴史に関する事実をいくらあつめても、全部をうめきれるものではない。それは伝記でもおなじである。わたしの『呉　秀三　その生涯と業績』（思文閣出版・京都、一九八二年）では一つ、「権可変、学不易」が箕作一族の信念であったろうとかいたが、このことばは資料にはでてこない。だが、幕末から明治前半期にかけて洋学がもてはやされ、迫害され、またもてはやされる（そのなかで一人はつかいころされる）なかで、学問をまもりぬいた一族の信条はそうであったに相違ない、とおもわれたのである。もう一つ、呉が門下に各地の私宅監置を調査させた動機として、東京府巣鴨病院からの患者逃走にたいする東京都内訓（注意書き）をあげた。東京都公文書館にあった内訓原案には、精神病者監護法の目的は監禁が主で治療は従であると、はっきりかいてあった。呉はこれに反発を

おぼえたと推測されたのである。

これは次項の問題にも関係するが、このあたりはシンポジストの篠田達明、および指定討論者の山崎光夫によってふれられるだろう。じつは、次項にふれるAのことで、小木貞孝氏（作家加賀乙彦）にたずねたところ、「できるだけ資料をあつめてかいていると、自分がその人になったようで、その場でのその人の気持ちがわかるんですよ」との答えであった。

三．医師が作家であるばあい

医師が作家であるばあいに、医学史上重要な出来事や人物、時の医療事情、時代背景について、作品化された証言がえられる。精神病医でもあった歌人齋藤茂吉の『赤光』（一九一三年）および『あらたま』（一九二一年）は、当時の東京府巣鴨病院（東京都立松沢病院の前身）の風景、患者のたたずまいをうたいだしている。精神科医である加賀乙彦の『頭医者事始』（一九七六年）および『頭医者青春記』（一九八〇年）は、東京大学精神病学教室および同脳研究施設での体験、とくに人間模様をおもしろくえがいている。なかでも、脳研究施設における小川鼎三および吉益脩夫（をおもわせる人）の人間像がきわだっている。もちろん、森鷗外の医人（考証学者である）伝、「澀江抽齋」（一九一六年）、「伊澤蘭軒」（一九一六―一七年）もある。医師が作家であれば、医学史をさぐりやすいことは当然で、このあたりは篠田からうかがえるだろう。

三．の特殊問題の（一）として、作家性が医学者性を侵食するばあいがある。生理学者の林髞はパヴロフの条件反射を日本に本格的に導入した人であるが、木々高太郎としては推理小説作家であった（それまでの「探偵小説」の呼称にかえて「推理小説」を定着させるに力あったのは、かれである）。わたしたちは学生のときソヴェト医学研究会で、パヴロフの原文を林訳『条件反射学（大脳両半球の働らきについての講義）』（三省堂・東京、一九三七

年）の創元文庫版と照合して勉強した。すると、林訳に、原文を逆に訳していて、しかも、かるくよむと前後うまくつながっているようなところを、いくつかみいだした（若者はこういう発見を手柄にしたがる）。「林さん、作家だな」と感じた次第である。

つぎにあげるAは、マスコミにもよくでる著明な精神医学者で、小説もかいている。Aはある事典で、クルト・シナイダー著の『精神病質人格』を解説して、つぎのようなことをかいた、――日本精神神経学会は一九七二年に「精神病質は医学的概念ではない」と決議したが、これにたいしシナイダーは、「精神病質概念はしんだかもしれない、しかし精神病質者はいきている」とつぶやいたという。このシナイダーは一九六七年になくなっている。また一九七二年のものは決議ではなく、シンポジウムの大勢であった。Aが霊能者であるとはきいていない。またAは、自伝的な文章のなかで、自分は東京大学教授の有力候補だったが、教室に反対派の勢いがつよいのでおりた、とかいている。関係者にきくと、教授詮衡第一段階で名のあがった大勢のなかにいたかもしれないが、最終段階にちかい数名のなかにかれの名はなかった、ということであった。

ここで、医学論文における事実確認から論文化までの過程を図式化すると、

表現力
事実の確認 ⟶ ⟶⟵ ⟶ 論文化
構想力

こういった過程があるだろう。Aのばあい構想力が肥大しすぎている。「空想性虚言症」という症状がある。Aにはこの要素がある、とさえいえそうである。

三．の特殊問題の（二）として、「森林太郎と森鷗外」という主題がうかびあがる。森林太郎は脚気問題では判断

をあやまりまた上司におもねって数多くの将兵をころした。その罪万死に値いするといってよい。かれは脚気問題での失策を公的にみとめてはいないが、晩年には当然それに気づいていたはずである。こういう大失策をした人としての後悔、無念さが森鷗外の作品にどう反映されているか。この点の検討はまだほとんどされていない。荒井保男の報告は、森林太郎の遺書をこういった観点から検討するはずである。

いずれにせよ、この特殊問題の（一）、（二）では、作品だけでなくその人の性格、生活史、家庭環境なども検討しなくてはならない。精神医学でいうパトグラフィ、――これは一般に病蹟学と訳されているが、富士川游は「病志」の語をあてた、「志」には、かきしるすの意もある、――がそれである。病志とは、せまい病気にかぎらず、生の発展と創造との関連性をさぐるものである。この病志の見方も必要であろう。

この月例会で「森林太郎と森鷗外」のシンポジウムをいつかやれることを期待している。

四．文学性のたかい医学論文

呉秀三、樫田五郎の「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」（一九一八年）は、日本の精神科医療史上もっとも重要な論文であるが、同時に格調たかい表現が随所にちりばめられている。呉の医学生時代の著『脳髄生理精神敬徴』（一八八九年）は、精神生理学の書であるが、漢文調の名文があふれかえっているといってよい。

医学史上重要でしかも文学性のたかい学術論文はほかにもおおく、そういったものをさぐっていくことも、「医学史と文学」という主題の展開となるだろう。

シンポジストの報告がおわったあと、討論の時間はあまりのこっていなかった。指定討論者の山崎光夫氏は、最近作の『大隈重信』を中心に、構想から作品化の過程を簡単にのべられた。司会が指名した山下政三氏は、い

ま森林太郎―森鷗外にとりくんでいると発言された。

最後に挨拶にたたれた吉村夫人津村節子さんは、酒井報告を補足する形で、つぎのようなことをはなされた。フィクションがなくても事実そのものがおもしろい、小説だけでなくて、講演もおもしろくてならない、というのが、吉村の信念であった。順天堂でした最初の講演はシドロモドロだったが、やがて講演も、おもしろくて聴衆が前の椅子に頭をぶつけるまでになった。速筆であった。『桜田門の変』をかいたとき、三五二枚までかいたのをすてたが、原稿は期日にちゃんと間にあわせた。このときは薩摩浪人なら示現流というので、鹿児島までいって示現流の使い手の太刀さばきを実見してから、かきついだ。原稿を期日までにしあげる点で、吉村は「作家の敵」といわれるほどで、津村さん自身もそれにプレッシャーを感じた。